
雷雨

麒麟さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雷雨

【Nコード】

N6001F

【作者名】

キリンさん

【あらすじ】

破綻していく自分の中で何かが作られてゆく

第一章 母親

こんなになるとは予想だにしていなかった…。

私にはすべてを知りたがる癖がついている。

それはまばたきを人より多くするのと同じ位の事だ。

自分にとっては当たり前前の生理的現象であってびっくりされる事ではない。

ただ相手が受け止められないだけの話だと思う。

私には友達がいない。自分では幸せなのか不幸なのか分からないが自分の幸せを計る為の怠惰な友達ならいらないと考えて生きてきている。悪いとも思わない。逆にいいとも思わない。

自分のすべてを捧げられる相手に出会ったら何もいらないからだ。

希薄な友情なんて面倒臭くて胡散臭くて邪魔だ。

そんな自分のすべてを捧げられる相手に世の中の人は出会ってどうその相手に接しているのだろうか？

私が愛した人は私にどう接していたのだろうか？愛情だろうか。逆に憐れみだろうか…。

憐れみであって欲しいとおかしい私は思うのだ。

かわいそうという気持ちは愛しいという気持ちより深い。情が

なければ湧いてこないだろう。あの人を私を助けようとし

ていたのだろうか…。

あの日の雨は天気予報でアウンサーがうるさく言う程の強烈な降りではなかった。私はそう記憶している。

朝と昼と夜の区別がつかない生活をしていたので定かではなのだが。

なぜなら社会に出て私は仕事をしていないのだ。1日ダラダラして猫に話しかけて録画したテレビ番組を何回も見て同じところで笑ったりしていた。最初のうちは貯金を切り崩していたが資産が底をついてしまい母親が心配して仕送りをしてきている。結構いいマン

シヨンに住んでいられるのもそのお陰だ。

感謝していると言えば感謝しているが何も他に感情が湧かない。別にそれでもいいと思っっている。

私の生活はそんなところだ。

冷蔵庫に入っている食べ物を漁ってる時きつと昼過ぎから雲行きが怪しくなり始めたに違いない。

近頃の天気は変わりやすい。昔は春から夏に変わる時位しか天気は荒れなかったのに…。

私は締め切っていたカーテンを開け窓の外を見た。

カーテンを開けた途端に私の上で稲光が走った。産まれて初めて感じる程の激しい稲光だった。何も身に着けていなかった

私は光に貫かれたのだ。 あんなにも強い光を観たのは何十年ぶりだろうか？ 私は全裸のままその場に立ち尽くした。

子供の頃良く母親が稲光が光った後数を数えていた。

「10以上数えたからまだまだ大丈夫よ」と心配性の私に説いてくれたのを覚えている。 稲光が光る度にその言

葉をすぐ思い出す。空がひかると雷が落ちるからおへそを隠さないといけない。雷の音が怖いと母親にしがみついて泣いていた。

私は今でも父親の顔を知らない。

あまり信頼出来る男ではなかった様だ。

会った事はないがきつと私に似ているのではないかと思っっている。顔も体躯も性格も全てが。

一度めつたにお酒を飲まない母親がかなり酔って家にいた時にそんな事を口走ったのを良く覚えている。その時はシヨックというか虚無感がこみ上げたが後から酔ってそんな事を言う母親を憎んだのだ。酔わなきゃ生活出来ない位嫌な目にあつたのだろうか…。大人というのは子供よりも質が悪いと思う。その時もそう思つたが今自分が大人になつてもそう思うのだから。

自分が幼少の頃は何故自分に父親がいないのかと不思議に思つた事

もあつたが成長するに従いそれは考えても埒があかない事に気付いたのだ。

男運が悪い母親から生まれたのだから仕方ない。

母親も父親がいない不憫な娘を可哀想と感じていた様でその事を力バーしようと必死だった気がする。そしてそれについてそんな母親を直視出来ない娘がいたのだ。私の幼少期はただ生きていただけだった。今もそれは変わらないかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6001f/>

雷雨

2010年12月15日14時29分発行